

Editorial

編集者の仕事というのは、本が出来上がることで一段落となります。もちろん、その後の販促やイベント開催など、拡販という重要な責務も残ってはいますが、文字に、内容になにか手を施してあげられるのはやはり印刷前までのこと。そういう意味では、編集者たるもの、企画の種を見つけたところから校了にいたるまでの過ごし方全てを、「編集」と考えなければならぬ、と感じています。

振り返ると、本企画の「編集」は弊誌創刊時より始まりました。きっかけは、神戸大学医学部附属病院の酒井良忠先生に転移性骨腫瘍ボードを見学させていただいたことでした。そして、東京大学医学部附属病院の篠田裕介先生に骨転移がんボード取材させていただき経験を通じて、各地域に散在する骨転移診療への熱を感じ始めました。いつの日かテーマに「骨転移」を取り上げたいという思いが、編集室に生まれたのです。

そして今回、ようやく骨転移をテーマとした一冊の本を世に送り出すことができました。3年以上もの長い時間をかけて実現した本企画ですが、だからこそ表現できたこと、詰め込むことができたものがたくさんあります。そのひとつが、骨転移診療の成功のカギを握る「チーム医療」へのアプローチです。

立命館大学・大阪いばらきキャンパスに、行かれたことはあるでしょうか。今回の「編集」過程において、ひょんなことから私が訪れた場所です。事前に、「大阪いばらきキャンパス内には公園があるんですよ」と伺っていましたが、到着して驚きました。学内に公園があるどころか、素晴らしく広い公園と大学が見事に融合しており、敷地内がボール遊びをする子どもや家族連れで溢れていたからです。「共同とは、こういうことか」と思いました。子どもにとって公園と大学はイコールであり、家族の生活には大学が組み込まれているのです。意図的な共同(協働)にはさまざまな障害が生じますが、教育機関と生活はここまで自然に融合できるのです。医療機関と生活、そして医療者とのつながりも、もっと豊かに連携していける可能性を感じました。

座談会のなかで、MDアンダーソンがんセンターの上野直人先生は、「Culture」を大事にされると仰っていました。

仲がよいグループは、自然とよい雰囲気やコミュニケーションができていて、考えてみれば誰もが体験していることだと思います。立命館大学と共同し、「豊かで楽しい生活」という関係で自然とつながる地域の方々も、きっと同じなのでしょう。施設規模でも、地域差でもない、普遍的に求められるチーム性を内容に含むことができたことは、「がんのリアル」を追求する弊誌にとって、重要なことだと考えています。

もっとも、最初から骨転移とチーム医療を組み合わせることを想定できていたわけではありません。骨転移のケアに必要なこと、実際に関わる医療者の方は誰なのか……そんなことに考えを寄せるなかで、自然と行きついたのが、この形だったということです。刻々と変わりゆく医療環境とニーズ、それを考えるなかでは企画も形を変えていきます。そのダイナミズムに逆らわず、なにかベストかを考え続ける姿勢は、医療者のそれと大きく重なるように感じました。

今回、企画は大島和也先生(ベルランド総合病院 リハビリテーション科・整形外科)と天羽健太郎先生(聖路加国際病院 整形外科)という2名の整形外科医を中心にご担当いただきました。お二人が骨転移診療のプロフェッショナルであるということはもちろん、チーム医療の実践者であるということがその理由です。施設規模や骨転移に関わるメンバーなど、さまざまな要素の違いを乗り越えて「骨転移診療の超実践」をしていただくことを目指し、本企画も施設の異なるメンバーで構成されたチームでまとめ上げています。さまざまなディスカッションを経て形になった内容は、骨転移の今を取り巻くエッセンスと言えるでしょう。

2018年6月に開催された日本緩和医療学会において、日本整形外科学会によるがんロコモへの取り組みが発表されました。今、まさに骨転移診療は変わろうとしています。骨転移を「見て見ぬふり」ができなくなり、あらゆる職種に積極的介入が求められるようになるのは、そう遠くはないのかもしれませんが。いつか骨転移診療におけるコミュニケーションがもっと当たり前のもの(Culture)となったとき、今身に付けた知識はきっと「転ばぬ先の杖」となることでしょう。

「Cancer Board Square」編集室 境田